

令和7年度 学校経営報告書（自己評価）

学校番号	18	学校名	西部特別支援学校	校長名	本杉 和美
------	----	-----	----------	-----	-------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
(1) 安心・安全な学習・教育環境づくり	ア. 事後も含めた緊急時の対応力向上	・災害時、緊急時に円滑に動けるための実効性のある訓練実施と危機管理マニュアルの見直し	AB評価 100%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な状況を想定した避難訓練を実施し、災害時の対応の見直しを行った。危機管理マニュアルや本校の防災備品を使用した防災研修を通して、災害時、緊急時の対応力の向上を図ることができた。 ＜医療的ケアに関すること＞ ・緊急時対応訓練をグループで行うことで、一人では気付けなかった想定や対応を知ることができ、嘔吐、発作などの初動が早くなった。今後もマニュアルの見直し等を行っていく。
		・災害時における医療的ケアの内容や物品の把握	AB評価 100%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・緊急時の対応を児童生徒のフローチャートとしてまとめて訓練や研修で使用した。臨床研修時には、教員、自立活動教諭、看護師、養護教諭、保護者、主治医で、体調の目安や対応について確認ができた。 ・災害時や緊急時のため校内で備えている医ケア物品について一覧表にし、学校全体の掲示板で周知した。酸素吸入が必要な児童生徒の予備の酸素ボンベも、保健室に保管している。
	イ. すべての児童生徒が体調を整え、気持ちよく生活できるための取組の充実	・教員と医ケア看護職員による医療的ケア連携体制の構築 ・医ケア検討委員会の月1回実施	AB評価 98.8%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・教員と看護師が協力して、安全なケアができているので継続する。 ・学校体制による人工呼吸器管理を行う児童生徒が4人となった。医ケア検討委員会は毎月1回実施できた。人工呼吸器管理を含む様々なケアがある中で教員と看護師が連携できるよう、情報の伝達や共有を日々行っていく。
		・安全で衛生的な校内環境の整備及び食環境の提供	AB評価 99%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・手洗い石鹸や消毒液、ペーパータオルの在庫確認、補充といった衛生面での環境を整えることができていっている。給食の提供についても異物混入は昨年度よりも減っている。 ・各行事における校内の安全な駐車計画を立案することができた。

(1) 安心・安全な学習・教育環境づくり	イ. すべての児童生徒が体調を整え、気持ちよく生活できるための取組の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・食事カードの活用と摂食カンファレンス及び摂食研修の充実 	AB評価 100%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・食事カード、摂食カンファレンス、研修を活用し、一貫した摂食指導を実施できた。また、食事カードの設置やカンファレンスは、安全な食事の提供に寄与した。今後にも生かせるように、研修や資料の整備、カンファレンスの手続きの周知に取り組む。
		<ul style="list-style-type: none"> ・性教育全体計画の活用と見直し 	AB評価 90.7%	B	<ul style="list-style-type: none"> ・性教育については、学習内容表を基に学期末に各学習集団で評価をした。後期末は行った内容に加えて具体的な指導場面を挙げたが、CD評価の割合が他の項目に比べると高くなった。課題として、どの学習場面で指導すればいいかが意識しにくかったことが挙げられた。来年度は、性教育の学習内容表を参考に、各教科の年間指導計画に位置付け、指導する学習場面を明確にして取り組む。
ウ. 多様性を認め合い高い人権意識をもった児童生徒と教職員		<ul style="list-style-type: none"> ・人権教育年間計画の活用と見直し、及び人権教育の視点を意識した授業の実施 ・情報モラル教育の充実 	AB評価 97.9%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・類型や学年に合わせて人権教育年間指導計画を作成した。学習活動において人権教育の視点を意識した指導を行う機会が増えた。今後は、児童生徒が人権意識を実感できる内容を含んだ指導計画を作成していく。 ・情報モラルについて外部講師を招いたり、授業内容に取り入れたりすることで学習することができた。
		<ul style="list-style-type: none"> ・教員の定期的な人権意識自己チェックと小集団による教職員の人権意識が高まる取組の実施 	AB評価 96.8%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・人権チェックシートを活用し、学期ごとに自己評価と、各学年と類型による話し合いを行った。外部講師を招いての全体研修では、学校や家庭における人権について知ったり、考えたりすることができた。来年度は話し合いの中で、児童生徒が人権を意識するための題材や活動についても取り上げていく。
	ア 教育課程の組織的な検討と仕組みづくり	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決プロジェクトの実施 ・教育課程や各教科等を合わせた指導などの各種押さえや、カリマネシステム図・各種教育資料の検討と活用 	AB評価 97.8%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科と自立活動それぞれの指導目標を考える際のポイントについての理解が進み、指導内容を明確にした個別の指導計画の作成ができた。 ・課題解決プロジェクトや教科部会と連携し、Ⅱ、Ⅲ類型で扱う教育内容の決定や指導内容の選定にも全校で取り組み、学部ごとに指導内容表を作成した。 ・自立活動指導計画により、児童生徒個々の中心課題や指導内容を明確にするといった意識づけが進んだ。

(2) 主体的な学びと地域の中で人と共に生きる力を育む授業づくり		<ul style="list-style-type: none"> ・ミドルリーダーを軸として全教員が教育課程を考えるあらゆる機会の活用 	<p>AB評価 99%</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領の内容を入れた年間指導計画の作成→授業実践→振り返りを行い、来年度扱う各教科の時数の設定や、教育形態の検討と決定に繋がった。 ・各学部ごと、教育課程の見直しを行い、次年度の教育課程についての検討と改定を行った。
	<p>イ 「主体的・対話的で深い学び」をめざした授業づくり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決プロジェクトの実施 ・自立活動と各教科、双方の視点による授業実践 	<p>AB評価 96.7%</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決プロジェクトの取組を踏まえて教科部会を実施し、授業実践につながる校内体制の充実を図った。教科部会では、授業づくりに活用できる「教科部会シート」を作成、共有することで、教科指導に対する共通理解を深めた。さらに、Ⅱ・Ⅲ類型の指導内容表や、知的代替教育課程における各教科の評価規準表を作成し、指導内容や評価の視点を明確にすることができた。 ・自立活動指導計画によって把握した個々の実態や課題と、ラーニングマップやSスケールによって把握した国語科・算数科の実態、「教科部会シート」等による教科観から、研修窓口となる教科等の指導内容と学び方を設定し、授業を実施した。また、新様式の単元カード、指導カードを活用し、各教科の段階(学年)、目標、指導内容、評価規準、評価基準を明確にしたことにより、教科特有の授業づくりプロセスで授業を組み立て実践することができた。訪問教育は、まるっとシートを活用して、自立活動特有の授業づくりプロセスで授業を組み立て実践することができた。そのため、充実した学習評価を実行することができた。
		<ul style="list-style-type: none"> ・S-PDCAサイクルに基づく授業改善と教育課程別研修による授業研究 ・各教科の評価規準表の作成 ・実態に応じた柔軟な学習グループの編成 	<p>AB評価 97.8%</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各研修グループの授業づくりツールを活用して個別最適な学びと協働的な学びについて検討することができた。この成果を来年度に引き継ぎ、より一層の自立活動の視点による学び方の充実を目指していく。

(2) 主体的な学びと地域の中で人と共に生きる力を育む授業づくり	ウ 教員の専門性向上	<ul style="list-style-type: none"> ・1グループ1授業公開を通した学び合いの充実 ・授業づくり・ケース会デイを活用した話し合いの充実 	AB評価 97.8%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・研修窓口となる教科、領域の日々の授業実践や1グループ1授業公開の授業実践では、授業づくりデイを活用して日常的に授業づくりについて話し合い、授業実践につなげることができた。この成果を窓口以外の教科等の授業実践へと般化させるために、時間の創出と多様な働き方の教師集団における授業検討の工夫の仕方を模索していきたい。
		<ul style="list-style-type: none"> ・からだ(姿勢・呼吸)や摂食に関する研修会の充実 	AB評価 94.6%	B	<ul style="list-style-type: none"> ・各種研修やカンファレンス等、ニーズや課題に応じて専門性を高める機会を十分に提供することができた。教員間での共有が行われた集団では、知識や技術の習得につながっている。今後の課題は、話し合いの機会や事後研修、作成資料の整理と活用である。
	エ キャリア教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア・パスポートの内容検討と見直し ・キャリア教育リーフレットを活用して将来の姿を見据え、個の力を最大限に生かすキャリア教育の実践 	AB評価 100%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・進路ファイルに綴じる内容の精選、キャリア教育にかかわる授業の各学部の現状把握を行ったことにより、キャリア教育にそれぞれがどのように関わっているかを再確認することができた。来年度からキャリア・パスポート実施するにあたり、混乱なくどの学部も取り組めるよう形式や実施方法を提案していく。
	オ ICTの活用の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・一人1台端末、視線入力装置、各種スイッチ、電子黒板、遠隔合同授業等の活用促進 	AB評価 94.4%	B	<ul style="list-style-type: none"> ・実践事例集を活用し、データベースの周知を行ってきた。今後は、児童生徒の実態や目標に合った機器選択や補助具、姿勢等の実践例を追加する。また、ICT機器の効果的な活用を目指し、12年間を見通したICTの実践を検討し、より活用頻度が増えるようにする。 ・遠隔合同授業については、他校の児童生徒の授業に参加し、遠隔で共に学ぶ機会を設けることができた。
ア 保護者や地域、関係機関との連携強化と情報発信	<ul style="list-style-type: none"> ・学校公開や青藍祭の実施 ・参観・懇談会の充実 ・ホームページやCOCOO、SNS等を活用した迅速な情報発信 ・校内外の作品展の実施 	AB評価 97.8%	A	<学校公開> <ul style="list-style-type: none"> ・2学期に実施し、参加者34名のアンケートではAB評価合わせて100%となった。特に教材教具の展示についての満足度が高かった。 <青藍祭> <ul style="list-style-type: none"> ・ホームページやインスタグラムを活用し、保護者や地域に向けてタイムリーに発信することができた。今後は、地域とのつながりを深める情報発信を目指し、地区の回覧板への掲載やポスターの掲示、関わりのある施設への 	

(3) 保護者・地域・関係機関と連携・協働した学校づくり	ア 保護者や地域、関係機関との連携強化と情報発信	<ul style="list-style-type: none"> ・学校公開や青藍祭の実施 ・参観・懇談会の充実 ・ホームページやCOCOO、SNS等を活用した迅速な情報発信 ・校内外の作品展の実施 		招待状の送付など、様々な方法を取り入れていく。 <参観・懇談会> ・コロナ禍で縮小していたが、回数を増やし、他学部も参観できる機会を設けた。来年度は、時間配分や内容の工夫を目指す。 <情報発信> ・特に行事後は、ホームページやインスタグラムでタイムリーな情報発信ができた。今後は、インスタグラムで掲示物や授業の様子等をより多く、タイムリーにアップできるよう、学校全体で取り組んでいく。 ・「進路だより」の発行、COCOOによる進路情報の提供等、進路に関する情報を発信できた。今後は、日々更新される福祉や進路に関する情報をよりタイムリーに発信する。 ・「西特だより」を地域や保護者に向け計画通りに発行、発信できた。 ・紙面でのアンケートをできる限り減らし、COCOOを利用してアンケートを実施、取りまとめを行うことができた。 <作品展> ・教科部会「図工・美術」と連携し、各学部が1回以上、校外の作品展に出展する取り組みを行った。学習の成果を地域に発信することができた。	
		<ul style="list-style-type: none"> ・支援会議、ケース会議、進路相談等のタイムリーな実施による校内外の支援体制の充実 	AB評価 100%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・関係機関からの要請で支援会議を行うケースでは、各機関との日程調整で開催がずれ込むことがあったが、必要なケースは関係機関と連携し、スピーディーに実施につなげた。今後も、学年、類型、関係機関とこまめな情報共有を行いながら、対応していく。 ・進路相談会、移行支援会議など進路に関わる関係機関との会議を予定通りに進めることができた。就労選択支援が始まり、それに伴うケース会議が増えたが、実態や希望に合った進路選択ができるよう、各機関との連携をさらに強めていく。
		<ul style="list-style-type: none"> ・学校間・交流籍交流での互いの良さが発揮できる交流方法・内容の工夫と事前打合せの充実 	AB評価 96.2%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・事後アンケートより、互いに関わりながら有意義な交流ができた学年、学部が多かった。一部、本校教員間の共通理解不足、検討時間が十分取れなかった例もあった。交流校の担当との打

(3) 保護者・地域・関係機関と連携・協働した学校づくり					ち合わせを充実させていくとともに、実態に即したねらいを本校教員間で共通理解していく。また、交流の目標についても、相互の触れ合いという交流の側面だけでなく、教科等のねらいの達成を目指した共同学習の側面も押さえ、交流校と目標を共有して取組を工夫できるよう、推進していく。
	イ 地域に根付いた学校づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会との連携による支援体制の充実 ・地域ボランティアの活用 ・地域資源を活用した活動の充実 	AB評価 98.9%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会で「つながりを大切にした学校づくり」について協議を行った。いただいた意見や情報を基に、各学部・訪問教育で地域資源を活用した学習を進めることができた。 ・地域ボランティアの登録は20人、活用は19回となり、学級活動、音楽、書写、英語の授業に来ていただいた。今後は、各教科の年間指導計画に位置付けられるような情報提供を行うとともに、学部と連携しながら活用例の紹介を充実させる。地域資源の活用については、近隣店舗の校外学習等の取り組みを集約、情報提供し、地域とのつながりが更に深まるよう推進していく。
	ウ 生涯を通じて豊かに生きるための教育活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・障害者スポーツの推進 ・文化活動の推進 ・読書活動の推進 ・合理的配慮等に関する理解啓発 	AB評価 97.7%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・部活動や、各種大会を通して障害者スポーツを体験することができた。 ・簡単にできる運動を授業担当者に紹介したり、授業で様々な運動種目を取り入れたりした。様々なスポーツ種目に触れることで、児童生徒が楽しく活動することができた。また、外部人材を活用した授業も行うことができた。 ・図書館職員による読み聞かせ会を実施するとともに、読書週間に合わせて図書便りを発行し、読書活動の啓発を行った。また、夏休みや冬休みには家族と共に本に親しむ「家族読書」を実施し、家庭と連携した読書活動の推進を図ることができた。
ア 共に支え合い、働きがいのある職場づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・組織マネジメント研修によるミドルリーダーの育成 ・日常的なOJLの実施 	AB評価 98.9%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・OJLの取り組みを「西特OJL」として位置付け、拡大運営委員会を通じて各学部・学年、分掌での取り組みを行った。「共に支え合い、学び合う職員集団」を目指し、各グループで共有ビジョンを立て、チーム内での話し合いや合意形成までの過程を大切にしたチームづくりを行った。今後も、共感に基づく対等な学び合いを大切にした質の高い教職員チームづくりに取 	

(4) 共に支え合い学び合う・生き生きと働く職員集団づくり	ア 共に支え合い、働きがいのある職場づくり			り組んでいく。 <職員安全衛生委員会> ・年間テーマを「円滑なコミュニケーション」と掲げ、取り組んだ。教職員のコミュニケーションの様子の共有に加え、委員が研修で学んだことや日頃心掛けていることについて掲示板で周知し、テーマに関する情報発信ができた。年2回のリフレッシュ活動では、コミュニケーションゲームに約3割の教職員が参加し、交流を深める場となった。今後は、心理面、環境面の両面から働きやすい職場づくりについて情報発信を行っていく。
		・複数メンター制度による若手育成	AB評価 100%	A ・複数メンター制による取組では、経験年数の異なる教員で構成されたグループごと、語り合いたいテーマを基に、年3回語り合った。特に実感できたこととして、「他の教員の考え方・価値観を知ることができた」や「悩みや不安を共有できた」を挙げる参加者の割合が高かった。今後は、実施時期やグループ編成の工夫等で、更に主体的な支え合い、学び合いにつなげていく。
	イ 指導の充実に向けた働き方改革の推進	・グーグルサービスの安全で効果的活用 ・適正な集団での授業と教員配置 ・1業務複数担当制の実施 ・チーム内で業務進捗状況の共有 ・完全定時退勤日の設定	AB評価 97.8%	A ・活用の仕方或使用上の注意点を学校掲示板等で周知することにより、グループチャットやグーグルフォーム等の安全な使用が定着してきている。今後は、生成AIの適切な活用等、引き続き効率的に業務遂行できるよう工夫して取り組んでいく。 ・授業に取り組む集団の大きさや学習内容に応じて、適正な職員配置での授業実施ができるよう部主事や学年主任等を中心に取り組んだ。適正な集団の捉えを共通理解し、合意形成しながら調整していくことが必要である。来年度教育課程が変更となるため、引き続きの取り組みを促進していく。 ・1業務複数担当制にすることで、個人で業務を抱え込むケースが減り、必要に応じて相談・分担しながら業務に取り組めることが増えているが、今後の更なる取り組み推進が必要である。 ・月一回の完全定時退勤日(17時学校施設)は定着している。職員の健康保持のため、継続して取り組んでいく。